新制
人
116

学位審査報告書

（ふりがな） 氏　　名	はまだ　きょうこ （すみだ） 浜田　京子 （角田）
学位（専攻分野）	博士（人間・環境学）
学位記番号	人博　第 473 号
学位授与の日付	平成21年7月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻

（学位論文題目）

統合失調症の両価性から観た主体の倫理的価値をめぐる構造論的問題

論文調査委員	主査　教授　　新宮　一成 副査　教授　　大東　祥孝 副査　教授　　津田　謹輔

人間・環境学研究科

氏　名	角田 京子

（論文内容の要旨）

両価性という言葉は一般的にも用いられ、対象の性質や概念の意義が二面的であることや、それを決定しようとする主体の態度が葛藤的であることを示している。元はBleuler, E.の造語であり、統合失調症の基礎症状の一つとして概念提示されたものである。両価性は相矛盾した2方向の心的内容が同時的に認められる精神心理症状であると定義され、主体側の態度についても、心的内容に現れる対象の性質についても考えられている。さらにBleulerは連合心理学の立場から両価性についての理論的説明を行っており、言語体系の構造と、それに対する主体の関係を問題としている。また両価性の現象は一般的問題と疾病特異的問題をカヴァーしており、両者は連続的なものであるとされた。

本論文は、統合失調症の患者が言語体系との関わりにおいて抱える本質的な障害を探究しながら、両価性の重要性を見出そうとしている。統合失調症の両価性の言語構造と力動を分析し、主体と世界の間の構造論的な問題との関係に着目している。さらにあらためて主体と世界との基本的な関係としての両価性の表現を展望し、一般的な主体および統合失調症性の主体が価値体系に参入する際に生起するパラドキシカルな倫理的問題を明示している。

第1章では、統合失調症患者が言語体系との関係で抱える基本的な困難が展望され、基礎障害ないし陰性症状に関する精神病理学的解釈が記号論のレヴェルで捉え直される。その際の仮説は、患者の記号世界における本質的な障害は記号のコノテーション理解にではなく、実践的選択にあるという命題である。調査はドイツと日本とで行なわれ、患者個人の臨床像との関連も考察されている。コノテーション理解の計量化について、記号体系の可塑的かつ超越的な性質と日独の文化／言語の違いに照らし、個人の理解を文化内モードからの差異によって計量化するという方法が採られている。記号選択について、生活の様々な側面について個人の主観的体験が質問紙法で調べられている。調査の結果、日独の文化差を考慮した上で、仮説が支持されている。さらに記号選択の困難は両価性に関係していることも示唆されている。

第2章では、経過中に両価性を呈した思春期統合失調症の日本の2症例A、Bが報告される。その両価性は善悪二項対立の形式を維持しながら、心的葛藤から自我ないし自己の分裂、幻聴へ向かう症状変遷のなかで反復され、端緒には善悪が反転するという独自の契機があり、最終的に悪＝攻撃性が圧倒的になってもなお同じ端緒の形式が維持されていることが指摘されている。この章ではさらに、言語記号論の観点から、両価性とは、正反対の意味が出現することによる記号の排他的選択の障害であると述べられる。善悪の反転は知性の両価性であると同時に、原始語において一般にみられる現象でもある。Freud, S.の精神分析の文脈においては、メタ心理学的概念である欲動の反転や死の欲動の優位から、両価性の差異を伴った反復と攻撃性の優位が理解された。

第3章では第2章の症例A、Bに新たに日本の症例C、D、Eを加えて5症例を呈示し、その両価的葛藤のヴァリエーションにおける各ヴァリアントの言語構造と力動の分析がなされ、その臨床的意義が考察される。そこから次の所見

が導き出されている；1)統合失調症の葛藤的な両価性は＜善、悪＞二項対立の形式を持っている、2)端緒は＜在＞について、その価値を＜善、悪＞二分法で問うものである、3)背景には＜在、不在＞の二項対立があり、「生きるか、死ぬか」の実存的葛藤を生起させる、4)最初は＜在＞が＜善＞に、＜不在＞が＜悪＞に対応しているが、次には＜在、不在＞と＜善、悪＞の対応が反転する契機がある、5)症状変遷においては、＜善、悪＞二項対立の形式が維持されながら、言語構造の上で＜悪＞の方が優勢となって両価性が反復されていく、6)最終段階には「殺すか、死ぬか」という実存的葛藤があり、＜善、悪＞二項対立の形式は維持されている。臨床的および構造論的考察においては、こうした統合失調症の両価性は、主体と世界とのラッセル型パラドックス構造のもとで主体の価値を問う葛藤を表現しており、特異的な所見である善悪の反転はこの構造のなかで生起していると考えられた。

第4章では、主体と世界との基本的な関係として両価性という現象を位置づけ、この展望のもとで、あらためて第2章と第3章の研究で見出された両価的な実存的葛藤への圧力と、両価的価値をめぐる善悪の反転が検討される。主体の自由意志による両価的な価値からの排他択一的選択、世界内における両価的価値の選択の要請、そして主体の意志と選択された価値と主体自身の世界における価値の連続的同時的な関係について、古代宗教から近代哲学、さらに構造主義的精神分析が参照枠とされている。

第5章は、第1章から第4章までの一連の研究を通じて見出されたテーマである善悪の反転と、主体と世界の関係におけるラッセル型パラドックス構造の関連が探究される。ここでは、現象学における世界内投企を主体の記号選択として捉えなおすことによる検討がなされている。患者の経験する善悪の反転は、世界内投企ないし記号選択の局面において、主体と世界とのラッセル型パラドックス構造の内部において起こっていることが確認される。この反転は、臨床的には致命的で特異的な現象であるにもかかわらず、論理的には意味を欠いた現象であるとされる。両価性は精神の分裂から統合にいたるプロセス全体に関わっているが、そのなかでも統合失調症の特異点はパラドックス構造のなかにあることがこの論文の観察である。著者はここから、この特異点での統合失調症における決定的な障壁を説明するためには、倫理的で両価的な価値がメタレヴェルに想定され、しかもその価値は非対称であるという一般論が要請されるということを論じている。

氏　名	角田　京子

（論文審査の結果の要旨）

統合失調症の概念を提出したBleuler, E.は、この疾患の症状を基礎症状と副症状に分けて考えた。基礎症状は疾患それ自体から出現すると考えられ、それゆえにどの場合にも認められる。それに対して副症状は、妄想や幻覚のように目立ちやすくはあっても、必ずしも現れるとは限らない。統合失調症を論ずるにあたって、精神医学はこのように目立つ症状ではなく基礎的で特異的な症状を求めて理論を組み立ててきた。基礎症状の一つである両価性はその意味で重要な概念として知られ、統合失調症の内的体験を医師が理解するための手がかりを提供し、精神分析のFreudによっても、積極的に採り上げられてきた。

ところが、内的体験に着目しているがゆえに、この概念は操作的に規定することが難しく、昨今の客観主義の症候論の中ではむしろ敬遠される傾向にあった。本論文は、古典期に認識されていた両価性という現象の重要性を、現実の統合失調症患者の内面世界に触れることによって再認識し、その論理的構造を改めて明確化し、概念それ自体の再規定の可能性を探究したものである。

本論文の特徴は、患者の言語的表現を細やかに拾い上げ、患者の側から患者の世界体験を追体験しながら論じているところにある。著者の追体験によれば、両価性という現象の中で、患者は命がけの選択の危機に直面している。両価性は一般的には、「同じ対象に向かって相反する感情や意志が現れること」として理解されているが、患者の側においては、「あれをしようと決めると皆に非難されるし、これをしようと決めると死ぬのではないかと不安になる」という、行動や感情を麻痺させる深刻な葛藤状態として経験されている。

本論文に登場する一人の患者は、「スリッパを横に置くか、縦に置くか」と考えてまったく前に進めなくなり、また別の患者は、「＜キタナイ、死ね＞と言われる」という被害関係妄想と幻聴に苦しんでいたが、一方では、小さな日常の行為一つ一つについて、自ら「キレイか、キタナイか」を問い、身動きが取れなくなっていた。そして、自らの意志でどちらかを選ぼうとすると、「キタナイ、死ね」という周囲からの非難が、幻聴や他人の動作の形をとって襲ってくるのである。著者はこれらの現象について、患者たちが経験している二者択一の状況においては、どちらが正解だという答があるわけではないことを洞察している。すなわち、自らが自らの意志をどちらかに決めて表出することそれ自体が、「キタナイ」あるいは「悪」という規定を受けるようになってしまうのである。日常生活が一つ一つの小さな自己決定の積み重ねであるとすると、統合失調症の患者はその一歩ごとに困難を覚える。このことを、本論文は両価性の問題として明確に示している。

しかし本論文は、こうした両価性の問題を臨床的に提示するだけではなく、患者の状況が言語理解の障害による選択の困難なのかそれとも実践的な平面での選択の困難なのかを突き止めるために、計量的な調査をも行っている。その調査はドイツと日本の両方で行われ、その結果、患者において両価性が現れるのは言語のコノテーション理解が障害されているからではなく、患者はコノテーションを理解した上で、実践的課題としての選択に困難を覚えていること

が示された。少数例での人間学的な観察を、症例数を増やし、文化差を越えて計量的に確認した点で、本論文は鋭い問題意識のもとに、両価性の概念を明確化するのに重要な寄与をなした。

続く第２章と第３章では、計５例の症例の内的体験と臨床経過が詳しく調べられている。症例から発せられた体験報告を、両価性の観点から本論文は次のように再構成している。すなわち、両価性は基本的に、善と悪の二項対立として患者によって経験されているが、この対立は、在と不在という中立的で論理的な認識に影響力を及ぼしていること、また、そのために自分自身が在るということそれ自体にただちにこの影響力が波及し、自分が生存していることが善なのか悪なのかという問いが生じていること、そして患者においては、この問いは、中立的な答えではなく、悪の方に傾く答えを導き出すことを迫ることが示されている。そのため患者は行動の選択肢が現れるたびに、生存の消去の方向に追い詰められると感じる。両価性における選択困難は、患者の体験世界においては生存を脅かすところにまで進んでいることが観察されている。

以上のように両価性においては言語理解の機能そのものは冒されていないにも関わらず、患者の実践的選択に致死的な影響が生じているということから、本論文は、次のことを示唆する。すなわち、人間が実践的選択の都度無意識に依拠している二者択一の論理構造には、選択する主体の存立そのものを危うくする必然が含まれているということである。第４章と第５章は、両価性のこの特性を論理的文脈で理解する試みに充てられ、とりわけラッセル型のパラドックス構造との関連が明示される。厳密に排中律に沿って推論を進めると、排中律それ自体が廃棄されるに至るという論理的な逆説が、患者の行動を規定していることが見出される。

このように本論文は、統合失調症における両価性の内的体験の構造を臨床的に明らかにし、この体験の論理の進行を辿り、また計量的な手法も駆使して理論化の水準を高めた優れた業績になっている。本論文によるこれらの所見は、統合失調症患者を理解する際に、ともすれば疾病による破壊的混乱の産物とみなされがちな症状に、一般的に機能している論理構造がかえって強く現れていることを示し、両価性という症状の重要性を再認識させ、かつ患者の内面世界への理解を促進するものであり、人間をその環境との関わりに沿って解明することを目指した人間・環境学研究科の理念に適ったものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成２１年６月１日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。